

有馬学著

『「戦後」を読み直す

——同時代史の試み』



評者：鈴木 健吾

「過去は外国である」⁽¹⁾とはイギリスの恋愛小説に出典のある表現らしいが、やはり有馬学『日本の歴史 23 帝国の昭和』の冒頭を思い浮かべてしまう。国家社会主義研究から出立し、無産政党から社会国家論まで、日本近代史を中心に手広い叙述を続けてきた著者有馬学（以下著者）は、『「国際化」の中の帝国日本』（1999年）で戦前期、『帝国の昭和』にて総力戦体制期を描いたが、ついに異国を離れ「祖国」の土を踏んだ。本書『「戦後」を読み直す』（中公選書、2024年）は、戦後史でも戦前戦後連続論や歴史叙述と高度成長の関連などの多くの先駆的な提言⁽²⁾をしてきた著者が1945年以降の彼の人生＝戦後日本において読んできた本から語る戦後史である。著者の読書歴については科学史家の米本昌平『遺伝管理社会——ナチスと近未来』（弘文堂、1989年）への言及⁽³⁾が目につ

くが、その他にも日本資本主義論争の影響力の説明に長洲一二『日本経済入門』（カッパブックス、1960年）を用いる⁽⁴⁾など、近現代史の社会思想史的叙述に通俗書やベストセラーを用いて鋭く切り込む作風は明らかであり、単なる「読書ノート」には留まらない可能性を感じさせる。

内容を要約してみよう。序章では高度経済成長による日本列島の変化について言及し、自身の人生を重ね合わせ、「一身にして二生を経る」と表現する。その上でこれまでの著者の取り組みとは異なる同時代史として戦後史を語ることを表明する。第一章「私の教科書」では、1956年版の大日本図書の小学校国語教科書の「T・V・Aの話」・「はえのいない村」など同時代の開発主義的なテキスト群を扱う。本章で取り上げられるのは著者の「戦前の中の戦後と戦後の中の戦前——昭和一〇年代における「革新」の諸相」で出典なしで取り上げられた教科書類である。上記の論文が1980～90年代に流行した戦前戦後連続説の嚆矢の一になっていることに言及したうえで、生活綴方運動や電化のためのダム開発などで半ば必然的に戦前戦後が連続する部分があることを認めつつ、東京通信工業（ソニー）製テープレコーダーによる音声教材使用がGHQの民主化によっていた点で戦前戦後の「断絶」を認め、「我が反「戦後」の確認」（11頁）としての戦後民主主義教育の見直しを試みるという方法論を確認する。総合開発の事例で宮崎県的小丸川をあげるなど著者の研究歴

(1) 有馬学『日本の歴史 23 帝国の昭和』講談社、2002年7頁。

(2) 有馬学「戦前の中の戦後と戦後の中の戦前——昭和一〇年代における「革新」の諸相」『年報・近代日本研究・10 近代日本研究の検討と課題』山川出版社、1988年、同「歴史は何種類あるのか?」『七隈史学』第21号、七隈史学会、2019年など。

(3) 有馬学「史料を読むということについての思考を強いた本」石井進編『歴史家の読書案内』吉川弘文館、1998年。なお米本の著作は本書の序章でも記される。

(4) 『帝国の昭和』167頁。

との交錯もわかりやすい⁽⁵⁾。第二章「[戦後]の終わり方、戦争の忘れ方」は日本が高度経済成長期に入り、著者が高校生になった1960年代を舞台にむのたけじ『たいまつ十六年』（企画通信社、1963年）と山口瞳『江分利満氏の優雅な生活』（文藝春秋新社、1963年）の二冊をとりあげ、長期的に見れば勤労者の富裕化の過程でありつつ、それを実感するのが難しい時期としての高度成長期を描写する。日本共産党と東亜聯盟運動の間で揺れ動き労働農民党から1955年衆議院議員選挙に無所属出馬したむのが農村共同体への経済成長の波及を拒絶していく過程と戦後混乱期の出版社の会社員として翻弄されつつ、サラリーマン小説において筆一本で立った山口瞳（の分身たる江分利満）の視角が、AA問題を文化祭で扱うなどの著者自身の60年代の記憶とが結びつき、敗戦直後の課題に固着しすぎてしまったむの（と戦後日本の革新）への「昔も今も、「対米従属」論は肌合わない」（63頁）著者の厳しいまなざしが際立つ。

前二章と比べ、第三章「『暮しの手帖』という問題」は本書では異質さを帯びる。というのも、近代史家として著者は雑誌『暮しの手帖』に関心を持ち続けていたとするが、著者の手元のそれは著者の母の蔵書なのである。『暮しの手帖』を通じて著者が述べるのは戦後における住まい方の変遷である。著者の家庭の住宅双六的過程の中で、居宅に設置された入浴設備「ほくさんバスオール」に焦点を絞り、灯油ストーブの普及と『暮しの手帖』の紙価を高らしめた「商品テスト」の普及と未発達な戦後の消費社会に踏み込んでいく。本章にもたびたび登場す

る杉森久英や山田文夫の回顧録などにより、花森安治が大政翼賛会宣伝部のコピーライターとして立身したことは周知の事項であろうが、本章はそれらとも種類が異なるいうなれば消費者側からの語りとして独立した価値を持つだろう。第四章「テレビは現在を写す装置だった」では著者の家庭でのメディアの変遷を1968年のTBS闘争もあって「きびしくいえば七一年、甘くみて七三年」⁽⁶⁾に終わったとされる「テレビ黄金時代」の様相を萩元晴彦・村木良彦・今野勉『お前はただの現在にすぎない——テレビになにが可能か』（田畑書店、1969年）と小林信彦『テレビの黄金時代』（文藝春秋、2002年）を素材に捉えていく。日本映画黄金時代の終焉や流行歌の商業歌化などの大衆メディア状況の到来を著者の家庭のメディアの変遷・鹿児島から東京への転居などの移動と関連付けることで、高度成長期のメディア環境を一億総白痴化（大宅壮一）とも一億総博知化（佐藤卓己）とも異なる形で描いていく。『テレビの黄金時代』が21世紀刊行のため著者の認識と同時代認識と入れ子になるという「少し反則」（147頁）ではあるのかもしれないが、特に日航機よど号ハイジャック事件（1970年）時の著者の家族間での挿話（148頁）などの個人的な叙述がアクセントになるせいかあまり目立たない。

さらに1976年度の九州大学着任とほぼ軌を一にし、日本社会は安定成長期かつ本格的な消費社会に入っていく。第五章「等身大の隣人——韓流前夜」では、関川夏央『ソウルの練習問題——異文化への透視ノート』（情報センター出版局、1984年）と『別冊宝島39 朝鮮・韓国を知る本』（JICC出版局、1984年）を通じ

(5) 著者の『宮崎県史』へのかかわりとそこから得られた地域史への視座については有馬学「ムラの中の「民党」と「吏党」——近代日本の地域・選挙・政党」『年報・近代日本研究・19 地域史の可能性——地域・日本・世界』山川出版社、1997年参照。

(6) 小林信彦『テレビの黄金時代』文春文庫、2005年（原著2002年）322頁。

た戦後半ば意図的に忘却された隣人である韓国・朝鮮に関する京城帝大以来の朝鮮史研究室が設置（1974年）された時期の九州大学文学部の若手教員としての著者のまなざしが光る。ポスト全共闘期の学生運動家の挿話に始まり、関川の著作に触発された1989年の著者の韓国旅行、同時期に北朝鮮の青年学生祭典に訪朝していた関川、という高度な連想ゲームが韓国・朝鮮学の政治性と語学としての韓国・朝鮮語の周縁性と絡めて展開される。一見知識人の読書史に不釣り合いにも見える別冊宝島シリーズが注9・注15の現役の韓国ジャーナリストである産経新聞の黒田勝弘の挿入とクロスすることで、日韓の市民派の認識とも異なる文字通りの「韓流前夜」を現出させる技倆は本書の白眉ではないか。第六章では徳大寺有恒『間違いだらけのクルマ選び——良いクルマを買うための57章＋全車種徹底批評』（草思社、1976年）と辻豊・土崎一『ロンドン—東京5万キロ——国産車ドライブ記』（朝日新聞社、1957年）を題材にマイカーが日本で普及する過程の消費行動の変化を見ていく。著者の幼少時の日本におけるイギリスのライセンス生産車の記憶から発売直後のトヨペット・クラウンの「国産車」によるユーラシア大陸縦断の企画、そして日本車のイメージとしてのトヨタ車（クラウン・カローラ・プリウス）に説き及ぶ。トヨタ車が日本車イメージを形成していく過程の描写を「悪貨はみごとに良貨を駆逐」⁽⁷⁾すると形容したトヨタ車たたきの論客・徳大寺の視角からするのは洒落で、消費社会が高度化する過程を余すところなく描いている。終章「戦後」の始原へ」は

山田風太郎『戦中派不戦日記』（番町書房、1971年）や同著『滅失への青春——戦中派虫けら日記』（大和書房、1973年）など忍法帖シリーズで知られる山田風太郎の一連の著作を題材に論じていく。著者は別稿で師の伊藤隆との初めての会見の際、伊藤隆『昭和初期政治史研究——ロンドン海軍軍縮問題をめぐる諸政治集団の対抗と提携』（東京大学出版会、1969年）を所持していなかったと述懐する⁽⁸⁾が、その著者が「史料の発掘に基づく実証研究」（239頁）により「日本ファシズム」研究なるものから抜けだ（同頁）していった経路と結びつけ、「無数の生きられた「戦後」」（256頁）についての試行的な叙述として本書をしめくくる。

さて、本書の「批評」には一つの工夫があるだろうと思われる。なんとすれば、戦後日本と文字通り軌を一にする著者の生涯と無限に近い書籍から偶然性に依拠しつつ読んだ通俗書ないし一般雑誌という題材は資料解釈の整合性などの論点で議論することを難しくしているからである。著者や著作についてのイメージを異にする（例えば山口瞳で文壇将棋などの批評の方を想起する）、あるいはテーマに対して異なる題材を選ぶ（例えば韓国批評について関川夏央か黒田勝弘か）などは考えられるが、よほどの事実関係のミスや断章取義がない限りは因縁をつけるような形にしかならないだろう。また、本書の折々に見られる戦後民主主義批判に関しては評者自身が著者の所説に影響を受けており、批判者として不適である⁽⁹⁾。

そこで本稿では、本書における読書史・思想的な「不在」を問題にしてみたい。まず、お

(7) 徳大寺有恒『間違いだらけのクルマ選び——良いクルマを買うための57章＋全車種徹底批評』草思社、1976年、101頁。

(8) 有馬学「伊藤史学が残したのもの——遺産の彼方に」『中央公論』138巻11号、2024年。

(9) 拙稿「『未完の都』から「市民文化」へ——乙訓の文化遺産を守る会からみた戦後日本と文化財」『年報地域文化研究』25号、東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻、2022年、21頁。

そらく多くの読者が気づく点であると思われるのが、本書の折々に見られる全共闘系の学生運動家としての顔にもかかわらず⁽¹⁰⁾、運動家・活動家としてのバイブル的な著作の不在である。著者のヒ首のような吉本隆明テキストの活用⁽¹¹⁾などは「名人芸」であるのかもしれないが、それでも第二章と終章の間、つまり学生運動家時代に自家薬籠中にしたテキストがやはりほしかった。

そして、何より気になるのは、戦後民主主義からの脱却や消費社会の拡大を同時代的な読書経験で扱うという著作にもかかわらず、新京都学派の著作がなかったことである。藪から棒にも思えようが、例えば梅棹忠夫『文明の生態史観』（中央公論社、1967年）の元となった「文明の生態史観序説」は『ロンドン－東京5万キロ——国産車ドライブ記』刊行と同年の『中央公論』⁽¹²⁾に連載されており、日本と西洋・東洋の距離感という意味で並行したテキストと言えよう。「第一地域」「第二地域」概念により日本を東洋ではなく西洋に漸近させ、「中洋」概念創出に向かっていく梅棹と、イギリスへの荷揚げ時に日本車への劣等感を持ち、スエズ動乱直後のアラブ民族主義の爆発を見つつユーラシア大陸を横切った朝日新聞の取材班との認識・経験の異同はそれ自体が日本がアジアと西洋どちらに近いのか、という戦後日本の問題系の十字路

でもあるように思われ、そのような思潮はアジア主義者（と言い切ってよからう）むのたけじの著作に同時代的記憶があり、韓国の再発見に直面した著者にもまた影響しているように思える。このほかにも「家事整理学」への『暮らしの手帖』の影響などの論点も考えられるため⁽¹³⁾、梅棹を例に出したが、消費社会論における山崎正和の不在なども気になることであり、同時代史のよりマクロな問題として提起しておきたい⁽¹⁴⁾。

「ミッシング・リンク」を探索してみたいくなるが、達意の文章の中で心内表現と挿入句的な注釈の多用により読みやすさを担保しつつ、戦後民主主義の終わりと消費社会のはじまりを描ききった本であり、一読を勧めるとともに、類書の刊行も俟ちたい。本書序章もAIの影響について言及するが、活字メディアが否応なく衰退・相対化され、平成30年と未発のシンギュラリティへ向かう令和以降を扱った読書史は書かれるのだろうか。「平成史」に「挑発」⁽¹⁵⁾されたわけではないが、「短い20世紀」の終わりの年生まれとしてそんな読後感も持っている。（有馬学著『「戦後」を読み直す——同時代史の試み』中央公論新社、2024年9月、277頁、定価：本体1,900円＋税）

（すずき・けんご 法政大学大原社会問題研究所兼任研究員）

(10) 第五章注2の日韓条約反対デモの理路についての記述など。

(11) 吉本隆明がムッソリーニのエチオピア侵攻を「解放戦争」と考えたことを記す『帝国の昭和』、8-11頁の引用など。

(12) 梅棹忠夫「文明の生態史観序説」『中央公論』72巻2号、中央公論社、1957年。

(13) 酒井寛『花森安治の仕事』暮らしの手帖社、2011年（原著1988年）、264-265頁。

(14) 拙稿「ある保守系知識人の自己形成——坂本多加雄「土曜会」原稿よりみる」『藝林』72巻2号、藝林会、2023年、75-76頁では著者より五歳年少の政治思想史家・坂本多加雄の「大東亜戦争」語法が林房雄ではなく新京都学派の上山春平の語法である可能性が高いことを論じた。

(15) 有馬学「『平成史』という挑発」『日本歴史』853号、日本歴史学会、2019年。